

## 第3回堺市文化芸術審議会 議事録（要旨）

### 1 開催日時

平成31年3月12日（火）15時～17時

### 2 開催場所

堺市役所 高層館12階 農業委員室及び共用会議室

### 3 出席委員（50音順・敬称略）

河内 厚郎 委員	（文化プロデューサー）
砂田 和道 委員	（くらしに音楽プロジェクト事務局長）
田辺 竹雲齋 委員	（竹工芸家）
中川 幾郎 委員	（帝塚山大学名誉教授）
花村 周寛 委員	（大阪府立大学21世紀科学研究機構観光産業戦略研究所・ 経済学研究科准教授）
弘本 由香里 委員	（大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所特任研究員）
森口 ゆたか 委員	（近畿大学文芸学部文化デザイン学科教授）
安井 寿磨子 委員	（銅版画家）

### 4 事務局職員

左近文化部長、永野文化課長 ほか

### 5 関係者

公益財団法人堺市文化振興財団

事務局長、総務課長、事業課長、堺市民芸術文化ホール準備室次長

### 6 議題

平成30年度堺市文化芸術審議会の答申書案について

## 7 議事録要旨

### 開会

---

### 議題

#### (1) 平成 30 年度堺市文化芸術審議会の答申書案について

---

<事務局より説明>

○河内委員

答申書は、特に重要なところを浮き彫りにするべきではないかと思います。

◎中川会長

重点項目としてマークすべきだというところがありましたら。

○河内委員

マークはできていますが、更にできないかなと。太字を増やすとか波線を入れるとか。

○砂田委員

実は 1 年前も同じ発言が皆さんから出て、中川会長と事務局でレイアウト含め再検討するというので昨年度の答申書ができました。その書式を踏襲していますが、見た時に分かりづらい部分があるので、インパクトのあるレイアウトが必要だと思います。ただ、これまでの議論していたことがかなり取り上げられていて、文化課の意気込みが感じられる。それはとても評価しますが、ここからが課題で、3 ページに「評価まとめ」として、全体評価が書かれています。5 ページからは「調査報告まとめ」で、今年度視察したことについての記載ですが、14 ページの「総括」で、全体評価と今年度のことが混在しています。昨年度の答申書のレイアウトを踏襲するようになりますが、全体評価についての総括と、中間まとめについての総括を分けないと分かりづらいのではないかと。また、昨年度の答申書でも今回の答申書でも課題を述べていて、総括でも課題が書かれています。それをどのように解決していくのか示唆されていない。そこで事務局に質問ですが、答申書は市長に読んでいただきますが、それ以外に庁内調整や交渉の材料のようにも思われます。その場合、もう少し資料として展開しやすい構成や文言が必要ではないかと思うのですが、答申書はどのように活用されているのですか。

●事務局（永野課長）

市の附属機関として審議会を設置し、年度ごとに諮問し答申をいただいています。答申を尊重し、市長に報告して、今後の施策に反映できることをしっかりやっていく。財政部局に対しても、予算も必要ですし、会長がいつも言われていますが、堺市には条例があり

ます。条例という担保の中にある推進計画をしっかりと実行していく。その実行のあり方を、基本的施策に属する具体的取組を含めて評価をいただいているところです。11 の基本施策を4年間かけて評価しているので、1年間の答申で文化施策全体に及ぼす影響がどこまでかというところではありますが、個々の事業について見直しも行っています。答申をもとに、年度ごとに見直した事業や廃止にした事業もあり、新規で立ち上げた事業もあります。延べ150ある具体的取組の中には、文化課の所管以外に、教育委員会や福祉部局で行っているものもあります。審議会からいただいた評価は担当部局に申し伝えますし、改善をお願いしていくことになります。

○田辺委員

審議会で話し合ったことが書いてあり、事務局から読み上げていただいたことは重点的に話し合ったことなので、その場にいた委員や詳しい方はよく分かると思います。初見時に少し分かりにくいかなと思う部分はありますが、説明しながら示されると思いますので。

◎中川会長

大前提のルールを共有しませんか。まず、答申書の表紙の「平成29～32年度〈4カ年〉に実施する評価の2年目」ということで、今回は30年度までの評価です。その仕方として、基本的施策の評価を一度にはできないので、1年目は①②⑨、2年目は③④⑤⑥の評価というように分けています。これは全委員の了解事項であることを前提に進めています。それ以外に、田辺委員や河内委員が言われたレイアウトや文字の大きさなど、関連するならやってみる余地はありますよね。問題は内容的なものですか。

○田辺委員

内容的な問題ではないです。職員や市長だけでなく、もっと幅広い対象に見せるのであれば、少し分かりにくい部分があるかと思います。

◎中川会長

市長に対する答申書なので政治文書です。公開されますが、市民に対して啓発するための文書ではありません。

○河内委員

最初に総括を読み、それから前から読んでいく人もいます。まず答申書のイメージを掴みたい。総括が短くあっさりしていますが、それは問題ではないですか。

◎中川会長

もう少し色付けしましょうか。敢えて言うなら、答申書は財政課に見てもらいたい。文化課が財政課にぶつけて、「こう言われています、こういう意見があります」という文書ではないかと思います。

○花村委員

今の記載だけでは事業内容が伝わりにくい。特に「事業概要」で、例えば「さかいミーツアート」では、「位置付けられている」「継続性を保つことが必要である」「環境づくりを推進する」ということで、事業内容よりも目標のようなことが書かれており、具体的な内容があまり書かれていない。資料の作り方も含め、写真等のビジュアルがある方が良いのではないのでしょうか。特に市長はお忙しいので、内容がすぐ頭に入ってくるように書くのが親切かと思います。また、長期的評価の必要性はおそらく議論されていると思いますが、特に子どもたちの育成や学校教育や人材育成については、2～3年では話ができないことが多いと思います。そうしたときに、長期的評価における蓄積方法は課題になってくるだろうと思います。4カ年の中の2年目で、残り2年評価を行ったときに蓄積されている方向なのか、4年間での傾向なのか。有機的に変えていくと言われていましたが、その変え方の基準も議論された方が良いのではないですか。

◎中川会長

今いただいた意見を反映させましょう。視察対象事業の様子が分かるように写真を入れるとか。

○花村委員

できれば地図もある方が良いと思います。どの場所を評価しているか、地図がある方が、堺市全体を網羅できているのか、他の地域はどうか分かりやすい。

○弘本委員

15～16ページの図は、小さくして前のページに持ってくる方が、流れとして理解しやすいのではないのでしょうか。それから、「具体的取組に対する評価」では、意見をできるだけ丁寧に拾ってまとめられていますが、順番をもう少し整理した方が良いと思います。というのは、13ページの「取組の有効性」で、いきなりカリスマ性あるプロデューサーの話や、交通の便が悪いという話が出てくるのですが、まず全体的な話を持ってきて、後ろの方に具体的な話を持ってくるとか、一つの筋を通して並べた方が説明しやすいと思います。

◎中川会長

総括的な意見を先に、より詳しく述べている意見は後ろに持ってくるということですか。

○弘本委員

そうですね。今回の特徴として、対立とまではいかないですが、異なる意見も入っているので、その並べ方をもう少し考えた方が良いのではないかと感じました。

◎中川会長

15～16ページの図を前に持ってくるのと、15ページに追記で、年次的に基本的施策①②

⑨、③④⑤⑥と説明を入れていただけますか。

○森口委員

質問ですが、7ページの「子どものための文化芸術プロジェクト事業」の評価指標で、「子どもアートプロジェクト参加者数」の28年度実績値が8,811人、29年度実績値が7,054人、30年度目標値が7,000人となっていますが、減ってきている原因は何ですか。

●事務局（雨宮補佐）

開催期間が異なり、28年度が最も長く、30年度は短かったということがあります。

◎中川会長

開催日数が減っているということですね。3日間で2日間になったとかですか。

●事務局（雨宮補佐）

約1か月間です。

●事務局（永野課長）

約1か月間の実施で7,000人の集客というのが、ほぼ上限に近いです。

◎中川会長

であれば、評価指標に補助指標がほしいですね。1日当たりの参加者数とか。

●事務局（雨宮補佐）

指標のあり方を目的に応じて見直す必要があると思います。

○森口委員

「堺市展開催事業」を視察しましたが、広報の問題を感じました。高齢者の応募が多く、いつも決まった団体の方々が出品しているという印象を強く受けました。「広く一般公募としながらも、実際は毎年応募している絵画グループや団体で固められている感が否めない。より幅広い応募者を確保できる対策を講じるべきである」というところをもう少し真剣に突っ込んで問題化していただきたい。

◎中川会長

どのように書けば良いでしょうか。

○砂田委員

この答申書は、課題を列記するところで留まっている。ある程度、解決に向かうように具体的に示唆する方が、説得力のある答申書になると思います。

◎中川会長

今後、堺市展のあり方についてオープンな意見交換の場を設けてはどうかということがその解だと思います。それは、若い人だけでなく全ての人を対象とした方が良いかもしれない。

○安井委員

皆さんが言われるように、分かりやすく書いた方が良いと思います。「さかいアートケーション」を視察しましたが、担当の方が本当に素晴らしく、良い人材なので、もっとアピールできないでしょうか。

◎中川会長

それは市の職員ですか。

●事務局（雨宮補佐）

健康福祉プラザの指定管理者で、文化・芸術を担当されています。

◎中川会長

それはすごく大事な話です。

○砂田委員

すごく意欲がある方で、財団としては、その方とうまく協力していくことが非常に大切です。障害のある方なのですが、その中で文化芸術のコーディネートを担当されている。

○安井委員

大事なことをきちんと伝えようとする方です。

◎中川会長

そのようなことを入れるとしたら、報告内容の中ですかね。「担当者の資質、専門能力を非常に重視するべきであると深く実感した」とか。

○安井委員

担当者 1 人ではなく、その補佐をする人、同じ考えを持ち一緒にやっていくスタッフがもう少しいれば、事業がスムーズに動いていくと思います。

◎中川会長

サポートするスタッフも必要だということは、全般的に言えることですね。ご意見をまとめると、総括的にインパクトのあるレイアウトにする。文字の大きさや、場合によってアンダーラインを引いても良い。重点的な箇所は強調しても良いのではないか。この判断

については、事務局と私に一任してもらいます。それから、ページのレイアウトとして、2ページの後ろ又は3ページの「評価まとめ」の前に、今の15～16ページの図を入れる。15ページには、何年に基本的施策の何番を評価するのか示すと初見の人にも分かりやすい。もう一つは、視察した事業だけでなく、基本的施策ごとに主な事業を並べて、その中で視察した事業を分かるようにする。それから、事業の写真があれば良いというご意見がありました。次に、全体評価も具体的取組に対する評価も同じですが、総括的、全般的なことを述べている意見を前に持ってきて、細かく尖った意見は後ろに持ってくる方が読みやすい。並べ方の工夫ですね。それから、総括は重要なので、詳しく書いてほしい。忙しい人は総括から読むというご指摘がありました。それから私が気付いたのは、基本的施策⑤「文化芸術を支える人材の育成」に属する具体的取組について、新しい事業を起こす予定はないですか。

#### ○砂田委員

2～3年前の審議会で話しましたが、「人材の育成」の「人材」には、色々な種類があります。「将来の文化芸術の愛好者」という意味か、「文化芸術のアーティスト」という意味か、「アートマネージャーの育成」という意味か。色々な「人材」があるので、そのあたりを分けて書かないと、受け止め方が弱くなる。

#### ◎中川会長

具体的取組に対する評価の中に、「文化芸術団体等にとどまらず、コーディネーター、ファシリテーター、プロデューサー等の役割を担う市民人材の発掘を手がけていく」というようなことを書き込めませんか。そうすれば、推進計画の改定時に反映できるのではないのでしょうか。安井委員の言われた健康福祉プラザの担当者の方も、その中に入ってきます。そういう人材を大事にするというトーンが出てほしい。

#### ○河内委員

芸術は何のためにあるかということ、最も大事なものは「個の表出」です。そうでないと意味がない。「自由都市」であれば、個人の自由な活動が塚に来れば許容される、そのあたりは言っても良いのではないかと。私は文化プロデューサーの養成講座に講師で呼ばれることがあります。定年退職した方が受講されることが多く、よく勉強しているのですが、個性的ではないのです。個性をどう育てるかは明確に分からなくても良いから、塚がうたい上げる。評価した事業はいずれも良かったと思いますが、もう少し事業を引き立たせるような仕掛けがあっても良いのではないのでしょうか。

#### ◎中川会長

アーティストだけでなく、アーティストと社会を繋ぎ、社会とアーティストを繋ぐという往復関係を構築できる人材が必要です。つまり、医者だけでなく、看護師も薬剤師も必要だという意味でのパラアーティスト。それを育てることが「文化芸術を支える人材の育

成」ではないでしょうか。

○砂田委員

最近は、芸術活動をするだけでなく、仕組みを作ったり、コーディネートして何かを具現化させたりすることに芸術的価値を感じるアーティストが出てきています。そういう人材が必要です。

◎中川会長

そういう人材の厚みがあると、まちがアーティストックになろうとする。アーティストが多いからアーティストックになるのではない。繋ぎ役がいるから、そこにアーティストが引っ張られてくるという関係になる。そういう意味で「パラアーティスト」という言葉を使ったり、「パラメディカル」と言ったりします。

○田辺委員

堺市展も、キュレーターのような人が入れば面白くなると思います。アーティストは会場にも魅力を感じます。堺市展は堺市駅前の文化館で開催していますが、魅力的かという点と少し残念に思ってしまう場所でもある。それを、文化施設を活用して、堺市にしかできない展覧会を実現できないか。プロデューサーが入りながら、作家が出品してみたいと思う魅力的な場所も大事かと思います。

○砂田委員

「キュレーター」という言葉だけでは限定されてしまう。東北地方のある政令市では、キュレーターが多すぎるという意見があり、やはり中川会長が言われたような、コーディネートする仕組みを作るという意味でのアーティストックな方、アートマネージャーでそういうセンスのある方が必要だということです。

◎中川会長

確かにキュレーターだけでは少ししんどい。キュレーター自身の評価がまだ日本で確立していない。

○河内委員

文化庁の文化戦略官に話を聞いた話で、意見が分かれると思いますが、文化というのは経済の余剰であり、心のゆとりであり、すごく大事なものです。先進国では文化を戦略的に使う。国家的イメージや付加価値の創出です。堺も「歴史都市」「政令市」をうたうなら、市役所全体で文化を戦略的に使うという野望を持てば、イメージも上がるし、観光で人も集まって来ます。そういうことも議論して良い時期に来たのではないのでしょうか。

○安井委員

もう一つは教育ですよ。

◎中川会長

単なる社会貢献のボランティアの育成ではなく、あるホールでやっているくらいの、延べ30~40時間程度の講義を受けないと世間に出しませんというくらいのトレーニングが必要かもしれない。

○河内委員

キュレーターは繋ぎ役といいます、本当は全体が見えないといけない。繋ぎだけやっ  
ていてもいけないのです。

◎中川会長

無意識のうちに社会調査能力を持っている人が優秀なのです。社会課題をパッと感じ取る。単なる正義感だけでやっている人は宙に浮いてしまう。

○田辺委員

堺で数年前に、文化財の特別公開に合わせて、文化財でアーティストが展覧会をするという「堺アルテポルト」という事業をやりました。女性の方がプロデュースされていて、なかなか面白い試みでした。

◎中川会長

そういう方を放置せず、繋ぎとめないといけない。

○田辺委員

その方は1人でプロデュースされたのであまりにもしんどくて、2回目はできない。

○砂田委員

パラアーティストやコーディネーターの話ですが、答申書の中で、「事業を統廃合することでコーディネート人材の予算措置が可能になるのではないか」とありますが、今アウトソーシングが増加して、委託で制作業務が発注される状況が発生しています。文化課や財団は自前で何とかやらなければならないという感じが強いですが、アウトソーシングできる場所はして、スタッフを増やす必要があるし、スタッフが最終的に堺のアートマネージャーになる可能性がある、アウトソーシングを早めた方が良いのではないかと思えます。

◎中川会長

いずれにせよ、人材のボリュームをもっと増やさないといけない。「文化芸術を支える人

材の育成」と言っても、美術展だけでは話がずれてしまわないか。その問題意識も参考意見として書き込んでほしいのです。言いたいのは、美術展が人材育成のための登竜門という位置付けになっている。そうではなく、初めから人材を作るという目的を明確にした育成プログラムや、人材を発見するためのツールを持たないといけないのではないか、という問題提起がほしい。

#### ○森口委員

耳原総合病院では、病院の中にアート専門のスタッフが 3 名いて、院長も積極的で、異文化交流会や様々な分野の人たちを呼んで、職員の教育のためにレクチャーを展開していましたが、病院の建物が新しくなったときに、「こんなにアートに溢れて、アートディレクターがいる病院なんて国内にもないですよ」と言いましたら、院長が「そう言ってもらえて嬉しい。堺の小学生たちに病院の中のアートを見せて案内するのであれば私がしますよ」と言われていました。先日も、財団と病院のアートスタッフが協力して院内コンサートが開かれました。既にそういう病院も堺にはありますが、案外そのことは知られていません。財団の方は積極的に協力してくださっていますが、そういう資源が既にあることをもっと紹介してもらいたいです。

#### ◎中川会長

それも意見の中に入れてください。劇場、音楽堂等の活性化に関する法律に基づく指針の中に、「医療機関との連携」という文言がありました。「福祉施設、医療機関等の関係機関と連携」「地域コミュニティの創造と再生」という、そのとおりに実現しています。その病院は公立ですか、私立ですか。

#### ○森口委員

私立です。そもそも病院もない地域で、日本家屋での無料診療から始めて、私たちの NPO が入らせていただいたときに、もちろん反対意見も多かったですが、院長が「こういう地域だからこそ本物のアートを入れ、地域住民の尊厳を高めたい」ということで、私もレクチャーさせていただいたり、色々な分野の人たちにレクチャーをいただいたりしています。

#### ◎中川会長

堺版アーツカウンシルを立ち上げるスケジュールの中で、福祉施設や医療機関にアートを供給していくことを主たる業務として位置付けることを確認しました。気になるのは、公立と私立の関係で、私立の病院が良いことをやりたいと言って、それに行政資源を多く導入すると、「何故その病院だけ」と言われても大変だし、やはりルールが必要だと思います。「一定の受け入れ条件が揃っているのでモデル指定する」というのであれば、民間でも大丈夫ということになる。森口委員のされていることは、それなりのモデル性も専門性もあるので、何らかのデータやエビデンスを用意していただくと助かります。それを事例としてパッケージ化できないかなと。そういう時期も近いと思います。お願いします。

○森口委員

はい。

◎中川会長

他にご意見ありますでしょうか。

○砂田委員

「総括」の部分ですが、上から 3 行目の「各具体的取組の実施主体においては、推進計画の目標達成に向け、事業内容を見直す際の参考にするとともに、より妥当性・有効性の認められる評価指標について検討されたい」とありますが、具体的に指標を達成するには業務手法や組織体制も見直して改善していかなければ、なかなか指標を達成できない。もう少し具体的に書かないと、前進しづらいままになってしまう。

◎中川会長

そのとおりにしたらどうですか。もう一度言ってもらえますか。

○砂田委員

「推進計画の目標を有効に実現するような事業を自主制作できるよう、実施主体の組織体制を見直していくべきである」。前回の審議会で、「自主制作」がキーワードでした。主催事業の中で自主制作を行う必要がある。文化会館事業も財団補助事業も買取り型の事業が多かったですが、地域の実情に合わせた事業を自主的に制作していくことが必要です。

◎中川会長

分かりましたが、それをメインにするには少し早いのではないですか。「自主制作への展望を開くために」とか、そういう言い方が良いのではないですか。全て自主制作と言われると総括として狭くなるし。つまり、評価指標について検討することに収束してしまっているから、そうではなく、事業内容そのものを見直さないといけない。事業主体のあり方もこれで良いのか、企画の立て方とか、全部言いたいのですよね。最終的に自主制作の能力を確立させるというストーリーに変えたらどうでしょう。

○花村委員

評価と育成と役割の三つについて、言っておいた方が良くと思います。一つめは、質の評価の考え方について、毎回議論になると思います。やはり量の評価になってしまうのですが、視察した委員の意見というのは主観的な意見ですが、重要なものだと思います。それを蓄積していく仕組み、主観が集まれば客観になるので、委員を入れ替えたりして色々な人の声を蓄積していく仕組みがあると良いのではないかと。二つめは育成の話で、砂田委員が言われていましたが、提供者側の育成と供給者側の育成と享受者側の育成。つまり、アートを受け取る側とアートを仕掛ける側の育成がありますが、議論を分けた方が良いの

ではないか。プロデューサーは提供者側ですが、こういう人たちと供給者側の育成の方法が少し違うような気がします。基本的施策⑥の健康福祉プラザの担当者の方が素晴らしいという意見が出ていましたが、すごく重要なことだと思います。そういう人を評価し拾い上げていく仕組みが重要ではないか。例えば人材バンクや、リソースを把握・蓄積していくようなことをしないと、担当者が変わってリソースがなくなってしまうとなったときに、個人でもいいからリソースを押さえておく必要があると思います。三つめはアートの役割の話で、先ほど河内委員がいくつか言われたのですが、これも二つあるとっていて、スペインでは、観光の中に文化や芸術が入っていくことは当たり前なのです。もう一つは、文化外交のような話です。外交の中に芸術が入っていくのが当たり前で、当たり前が芸術が溶け込んでいくというのは非常に重要で、創造都市の話も含め戦略的に芸術というものが繋ぎになって色々な問題を浮き彫りにしていくという役割があると思うのです。一方で、アートの問題解決を前に出しすぎると、アートの本質が失われてしまう。アートで社会課題を解決するというのは今あちこちで言われていますが、社会課題の解決とは何なのか、本当に芸術で社会課題が解決できるのか。音楽を聴いて、演劇を観て、美術を観たからといって貧困の問題は解決しませんが、問題の捉え方は変わるのではないか。アートに触れた人は、自分は貧困だと思っていたが実はそうではなかった、見方を変えるだけでこんなに豊かに寛容になれるのだということ、アートを通じて享受者側が学ぶというような役割が一方で疎かになってはいけません。供給者側と享受者側の戦略は違うのではないかという気がして、その享受者側の中から供給者側が出てくるという話が将来的に繋がると思うのです。そのプロセスが見える形にしておく。享受者側の寛容性・創造性・柔軟性が芸術を用いてどのように豊かにしていくのか。そこが成熟化していくということの意味ではないかということ、もう一度確認しておきたいと思います。

◎中川会長

それは今回の答申の中でどのくらい反映できますか。

○花村委員

答申の話というよりもっと長期的な話です。

◎中川会長

質の評価の重要性は全員認識していると思いますが、議論すると袋小路に入ってしまう。視察は現場の方と一緒に回りましたが、そこで質の評価は行っています。

○花村委員

主観的な意見が非常に重要で、それを蓄積していく仕組みが必要だと思います。

◎中川会長

リソースの把握は非常に重要ですが、今は中間支援的な人材はほとんど把握できていな

と思います。逃げの一手として中間支援型の組織を作ってはどうかと、多くの自治体はそこで止まっていますが、実はそのような組織もできないのです。文化センターのようなものがあるとしても出てこない。それをやろうと思えば、きちんと講座やスクールを作る以外ないのです。そのスクールに来てもらってふるいにかけるしかない。いわゆるアートコーディネーターですね。アートが好きというだけではいけない。

○花村委員

現場の人間をどのように評価するかというのはとても大事だと思います。現段階で評価する仕組みがないですね。今回、基本的施策⑥「多様な分野との連携」の報告内容に書かれていることも、本当は基本的施策⑤「文化芸術を支える人材の育成」の評価にも入るのではないかと。そういうときに個人をどう拾うかが重要になる。

◎中川会長

それはここでは書き切れませんが、きちんとした評価システム、評価指標が必要になる気がします。アーツカウンシルではそれが絶対に必要です。また、花村委員が言われた「供給側」という言葉。私は、実はアーティストは供給者側ではなく生産者側だと思っています。供給能力は持っていない。自分でプロモーションを行うアーティストもいますが、そういう能力を持っているアーティストと、それを第三者に委ねるアーティストがいます。それを分けた方が良くと思います。

○花村委員

そうなると三つですね。生産者と流通者と消費者、享受者。

◎中川会長

供給者は流通を扱う人というイメージです。そこに、いわゆるプロダクション型のプロモーターばかりに任せない、自分たちでも流通に参入して評価し、且つ自主制作もでき、場合によってはアーティストと協力して新しい空間も創る力のある人が出てきてほしい。

○花村委員

パラアーティストの議論ではないですが、三者共に創造性が必要だと思います。生産の創造性、流通の創造性、享受の創造性。享受の創造性が上がることは市民度が上がることだと思いますが、砂田委員が言われた流通側の仕組みを作る、コーディネートするというのは流通側の創造性なので、そこに言葉が必要かもしれません。ある種のロールモデル、仕組みを作っていく人たち。アーティストと同等に並ぶ創造性を持っている。

◎中川会長

芸術創造に関する起業家は多くいます。鑑賞に関する起業家も生まれてきました。ところが、アートの流通部門に関する企業能力というのは閉じられてしまう。そこに非常に

かした独占や配給の歪みがあるのに、それについての論評が全く行われていないことが問題です。ですから流通部門は市民化する以外ないと思っていますのです。

○砂田委員

私が今年度口を酸っぱく話しているのは、リレーショング、そのリレーショングをどう作っていくかということです。そのためには流通を促進する人が必要ですが、ある県の音楽団体で、パブリックリレーショングを重視して活動した 3 年間で、定期演奏会が満席状態に V 時回復しました。そこは広報も素晴らしいのですが、県民が支える努力をしているし、県内の財界も支えている。それはどのように地域と対話をしているかということの賜物なのです。そうしない限り、これは打開できない。

◎中川会長

ここから自主制作の言葉が出てくるわけで、パッケージプログラムばかり買っていると創造性は消えていきます。パッケージプログラムが劇場を潰していく。否が応でも自主制作能力を培養しないといけない。見方を変えると、地域ときちんと向き合っているかということです。そうすると、その地域に必要とされているものが見えるはずで。

○花村委員

広い意味でのマーケティングですね。パブリックリレーショングという話もありました。

○河内委員

地域に向き合うというのが、その市民に対してだけかという微妙で、ある市のホールが地道に成果を上げているのですが、そのホールでは劇作家の養成学校を創設し、着実に認められてきている。地域のニーズについてどのような捉え方をするか。潜在的なものを掘り起こす必要があります。

○花村委員

マーケティングというのは、今ないニーズをどう掘り起こすかという話ですよ。

○河内委員

他のホールが一気になくなり、そのホールだけが残った。それは、劇作家の養成を行っていることが大きい。対照的な例は、2000 年に堺で行った世界民族芸能祭。内容は悪くなかったのですが、そのときの人材などが継承されず、1 回きりのイベントになったのです。

◎中川会長

イベントというのは、本当は人材を繋ぎとめるための装置でないといけない。終わった途端にさようならでは意味がない。イベントはシステムを成長させる装置であり、人材を繋ぎとめる装置でもあるのです。ということで、次年度に向けて色々な助言をいただきました

と思いますが、それを示唆するような書きぶりを盛り込めば良いと思います。答申書については、私と事務局に任せていただければよろしいでしょうか。事務局から何かありますか。

●事務局（雨宮補佐）

各基本的施策の具体的取組を一つずつ選んで視察し、意見を交換していただきましたが、そうした評価の仕組みや評価方法についてのご指摘をいただければと思います。我々も予算などの制約の中でどうしていくのかは考えていけないのですが、ご提案やご意見ありましたら。

◎中川会長

今日出た意見の中に質の評価というのがあったので、それをどうするかが宿題ですが、今年度のように委員が事業を視察した上で、これは質が高いとかこういう点が良いとか、積極的に書くようにしませんか。良いものは良いと書いてあげたら良いと思います。

○弘本委員

例えば、「さかいアートケーション」の評価で人材育成の話がたくさん出ていて、そうであれば人材育成について議論するような、もう一段階が必要ではないでしょうか。

○花村委員

個別の具体的取組の評価と、全体を横に繋ぐ評価があっても良いのではないかという提案でした。

◎中川会長

評価というのは大変難しく、一つの価値軸があり、それに沿って行うものだけでも、アートに関する質の評価というのはそれが混在している。品格がある、素晴らしいスキルがある、社会的に意味がある、というのがごっちゃになっている。すると、評価する人の価値観もまた反映される。腕前がどうであろうと構わないという人のスキルはあまり評価できないし、良いものは良いのだという芸術至上主義の人は社会課題なんてどうでも良いと思っているし、そういう点でずれが生じますよね。けれども分解はできます。

◎中川会長

事務局から何かありますか。逆に質問やコメントはありませんか。

●事務局（永野課長）

人材育成については基本的施策として打ち出しているのですが、それがしっかりと分かるように指標を出していないといけないというのが反省点です。まさに条例の中にうたっていますので。

●事務局（雨宮補佐）

堺市展についてご意見をいただいた中で、高齢の方の応募が多く、若い人に道が開かれにくいというご意見がありました。参考情報としてお伝えしたいのは、若い人に道を開くための「New Face Art 展」という事業があり、堺市展で入賞された40歳未満の方を対象に、市役所のロビー等で作品を展示したり、アーティストバンクに登録し、まちなかコンサートという形で発表の場を提供したりしています。ただ、そういうことも実績として表れないとご意見に答えられませんので、堺市展で若い人に道を開くということを、現在実施していることも含めてもう少し追求していきたいと思っております。

◎中川会長

アーティストバンクというのは、アーティストの発掘要請の事業ということですか。

●事務局（雨宮補佐）

そうです。アーティストバンクという制度があります。

◎中川会長

堺のアーティストの人材バンクですか。

●事務局（雨宮補佐）

そうです。こちらはアーティストとしての人材育成で、今回お話のあった、コーディネーターやパラアーティストの人材育成は十分にできていないところがありますので、そうした人材をどのような形で育てていくかが課題だと思います。

○田辺委員

堺市展でも賞を取って若い人が展覧会に出ることがありますが、若い人がそれを目的に出品するということにはなりませんよね。偶然若い人が出品して、この枠に入るの展覧会をさせようかというところなので、それではあまり効果がないと思います。「こんなところで展覧会できるんだ、こういうものがあるんだ」ということを知り、若いアーティストが応募すれば意味があると思っております。

●事務局（永野課長）

そのとおりだと思います。堺市の唯一の公募展ということで、芸術に携わっている人がこの展覧会に出品して賞を取るのがステータスだというくらいの想いを抱いているかというと、70回以上続いているのですが、やはり毎年決まった方々が出品していることは否めないもので、そこを変えていくために、40歳以下の方を対象とした発表の場を設けるなど試行錯誤していますが、まだまだめざすところがあると感じております。

○花村委員

根本的に変えないと、一部変えてみるというレベルをこの先10年続けても、ほぼ成果は出ないのではないかと正直思います。

●事務局（永野課長）

実現性の問題もありますが、例えばフェニーチェ堺のロビーを1年間使用できるというような、出品者にとって魅力のあるものができれば、また違いますよね。

○森口委員

審査員の方は、一度就任されたらずっと続けられるのですか。

●事務局（永野課長）

3年に1度交代しています。やはり外部委員も入れていくべきだという声もあり、数年前から外部委員が約半分になっています。公募展として相応しい審査ができるか、もっと魅力ある展覧会ができるかを考えていかないといけないと思います。

◎中川会長

アーティストバンクはそれはそれで良いと思いますが、堺はパラアーティストを開発する視点や制度がないことに危機感を覚えている、それを答申の中に、次年度やアーツカウンシルの設立に向けた示唆として入れてほしいということです。それは財団と協力した話と関連してきますね。

○砂田委員

東文化会館で子供向けの体験ワークショップを1度に4つ受けられるというものでしたが、参加者からのアンケートで、「今までの堺の事業と全然違う、ワークショップの方法が素晴らしい」ということが書かれていて、演目の選定が良かったのかもしれませんが、ワークショップの手法、起承転結がしっかり組み立てられている。やはり今までと違うやり方をできるようにしていかなければならないと思います。

◎中川会長

試験的に実施して成果を上げていると聞いているので、そういうことができる人材をもっと自前で要請できないかという問題意識です。

○弘本委員

基本的施策⑤「文化芸術を支える人材の育成」に属する具体的取組は三つしかなく、11の施策の中で最も少ない。しかも全て再掲です。やはりそこに対する力を今まであまり注がれていないというのが実態だと思います。やりやすいことをどんどん付け加えていくとどんどん仕事が増えて中途半端なものが増え、全てが実っていかないというのはよくある

ことなので、やはり根本的に直していかないと、スタッフもどんどん疲弊してしまう。やる気のある方はたくさんいらっしゃると思いますので。

◎中川会長

それは一度、事務局と相談します。例えば、「さかいミーツアート」をもう少し広げて、就学前の子どもたちにアートスタート事業をやったらどうかという議論もあります。それをやろうと思うと、美術系のコーディネーター、音楽系のコーディネーター、工芸系のコーディネーター、演劇系のコーディネーターなど色々いらっしゃると思います。

●事務局（雨宮補佐）

今年度から、未就学児を対象に「アートスタートプログラム」という事業を立ち上げました。

◎中川会長

ハイレベルでなくても、そういうところをきちんと世話できる市民人材が多くいるという問題意識で言っています。そこから更にレベルの高い層が生まれる。図書館の「ブックスタート」という事業では、子どもに読み聞かせできるボランティアリーダーが多い。司書ではできないので助けてほしいということですが、携わっている人の技量がすごく上がっています。そういうふうに育っていく市民は多い。そこからアートコーディネーターが生まれてくるのではないかと思います。夢みているわけではなく、具体的にイメージを持って言っているのです。市民人材をもっと作らないといけない。

○田辺委員

堺のアーティスト派遣事業では、小学校へ年に1人1か所行ったとしても、それでは対象者が少ないので、そこで体験した人たちには意味があっても、それが後々どう広がっていくのか、数をこなさないという意味がないと思います。

◎中川会長

全小学校ではなく、受け入れてくれる小学校をピックアップしています。やはり学校教育の現場との負担の関係で壁があることは事実で、それを突破して前進しているとは言えない。願わくは全小学校に広がってほしい。しかし、それよりも先に就学前の子どもたちに根付けた方が良いのではないか。その会場の世話をしたり、アーティストと子どもたちを繋いだりする役割をする人が必要ですが、そのままアーティストにさせるという乱暴なことはできない。そういう人材がもっとほしいという話から、パラアーティストというのができたのです。その手掛かりがほしいから東文化会館で一度やってみると、すごく評判が良かった。アーツカウンシルの議論と平行して必要になるのではないですか。他にご意見ありませんでしょうか。

○河内委員

「総括」の部分ですが、項目を増やすのではなく、堺はこういう文化をめざすという黄金の一言がほしい。

◎中川会長

先程の言葉を使うなら、「自由都市」というコンセプトが必要。「個性的な人が花開く、受け入れられる」というような。

○花村委員

「自由である」ということをどう考えるかですよね。寛容で、創造性がある、柔軟性がある、そういう市民が増えるというのは、その都市の成熟度が上がるということだと思うので、そういうことと掛けて書いてもらいたい。

◎中川会長

「寛容性」というのはキーワードで、創造都市は「寛容性」を要素にしています。異文化に対する寛容性、個性に対する寛容性。

○花村委員

寛容性というのは芸術くらいですよ、バラバラで正解がない。青を使っても赤を使っても良い。これも良いね、あれも良いねと発見できる能力なのです。違いの中で違いを発見し、相手の違いを面白いと思える寛容性がある、その中に個性的なものを見出していく創造性があるという。そこが成熟した市民だと思うので。供給者側に提供する、アートを享受する側がアートを見るトレーニングをしていく。

◎中川会長

イメージとしては、「様々な個性に触れられ、様々な個性が花開き、様々な個性が育つまち、自由都市堺」ということですよ。それに対して市民も寛容である。

○河内委員

全部を言わず、それに繋がるような何か一言を書く。

◎中川会長

「自由都市堺」のコンセプトを1~2行書けば良いのではないですか。

○花村委員

具体的にイメージできるような。

◎中川会長

それではこれもちまして、第 3 回審議会を終わります。ご協力ありがとうございました。

**閉会**

---